

酪農・豆知識 第125号

平成30年度牛群検定成績速報について

1.はじめに

家畜改良事業団は平成30年度の牛群検定成績速報を公表しました。

平成30年度は、昨年に引き続き飼料価格や初妊牛・子牛の価格の高騰、生乳需給の逼迫など厳しい酪農状況でした。そうした中で牛群検定における検定農家普及率は53.5%、検定牛比率で62.5%と昨年を若干上回る普及状況となりました。検定農家の普及率（検定農家比率）では、鳥取県、宮崎県の81.3%を先頭に、70%以上が福岡県、鹿児島県、60%以上が北海道、熊本県、岡山県、沖縄県、愛媛県となります。本成績は84万頭を集計したものです。

2.305日乳量からみた泌乳能力

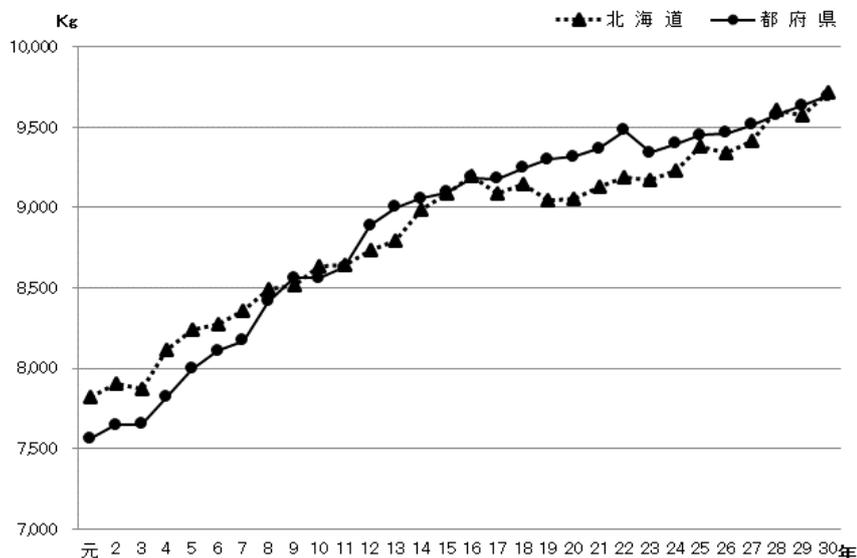
平成30年の305日乳量は平均9,711kgと高乳量となり、北海道9,719kg 都府県9,694kgと、ともに過去最高乳量となりました。直近3か年の推移でみると、北海道では29年度に泌乳量の低下がみられましたが、平成30年度においては毎年順調な伸びを示す都府県を若干上回るなど回復の兆しをみせています。

また、自動搾乳（搾乳ロボット）検定が急速に普及していますが、305日乳量も顕著に伸びており全国平均で10,742kg(前年度+272kg)におよんでいます。

産次別の能力では、初産8,750kg(前年差+63kg)、2産10,094kg(前年差+114kg)、3産10,477kg(前年差+119kg)、4産

10,460kg(前年差+121kg)、5産10,021kg(前年差+146kg)と初産から5産までの泌乳能力は顕著な伸びを示しています。

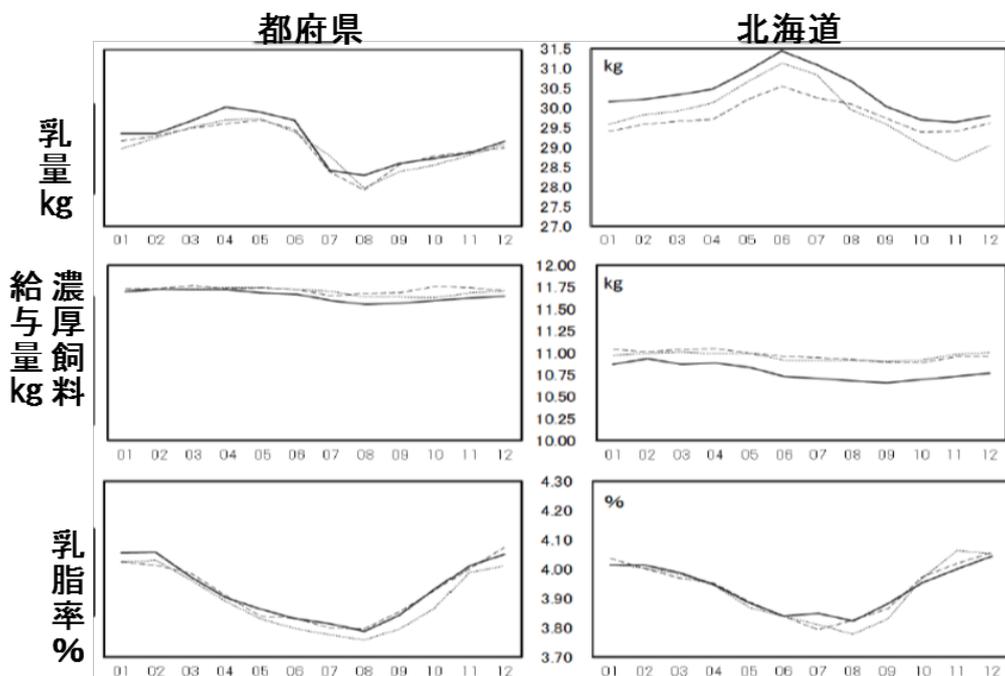
牛群検定における305日乳量の推移



3.月別検定成績から見た生乳生産状況

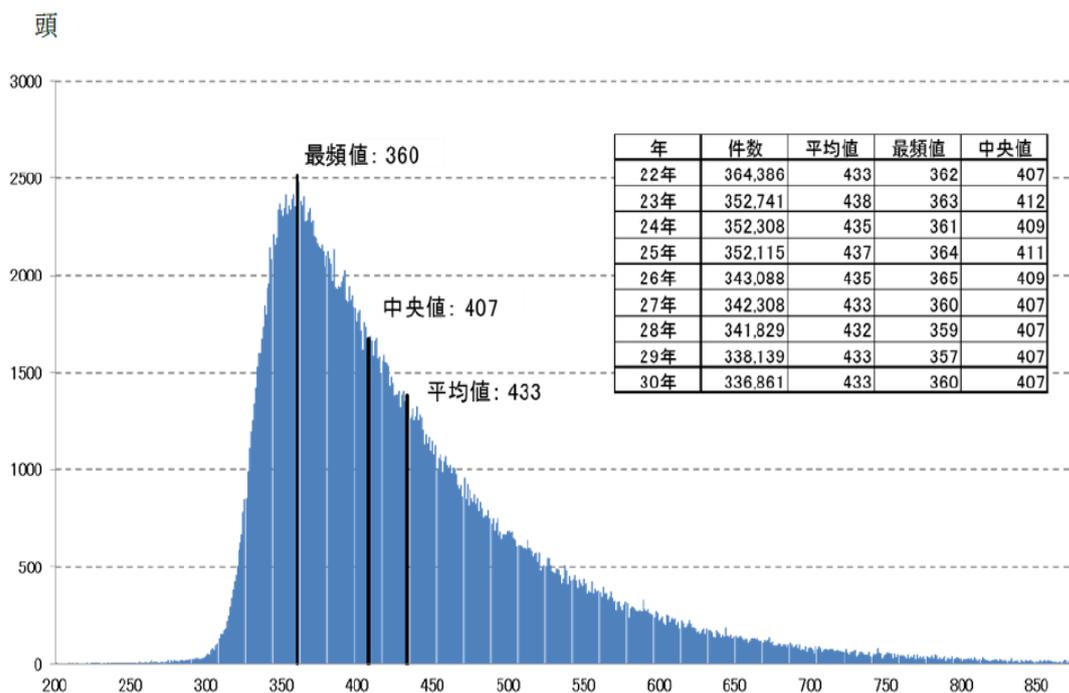
平成28年から30年までの3か年の月別検定成績の推移を図に示しました。都府県と北海道の泌乳パターンは大きく異なり、都府県は特に夏季の暑熱を受けていることがうかがえます。北海道の乳量

は例年を大きく上回り推移しましたが、濃厚飼料給与量の推移は例年に比較し大きく低下しています。



4. 繁殖成績

分娩間隔は全国で433日と昨年同様で、過去最長だった平成23年の438日からみれば5日間短縮しています。しかし、都府県と北海道で分けてみるとその差は縮まっていません。図の分娩間隔の分布でわかりますように、最頻値は360日、中央値は407日です。これは国内の牛群検定牛の半分の頭数は分娩間隔407日以下と良好であることを示しています。



また性選別精液の利用が急拡大し、雌子牛の修正割合が54%以上となっています。そのため後継牛の維持にも目途が立ちつつある状況です。双子の分娩率は産次が進むにつれて増加傾向にあり、初産牛が1%未満であるのに対して、4産以上では4%程度となっています。

死産についてですが、北海道の初産の死亡率が非常に高い傾向にあることです。冬季間の寒冷の影響が無視できない状況にあります。

4. 終わりに

平成30年の冬は気温が低い状態が続き、初夏は豪雨、また酷暑の夏でした。そのような気象条件下でも乳量の生産は伸び、繁殖性についても大きな問題は見られませんでした。この調査成績は、我が国における酪農家が飼育している乳牛の現状を知る上での貴重なデータですので、各方面で利活用されるものと思います。

日産合成工業株式会社 学術・開発部

